

目次

近代文章史の諸問題	吉田 澄夫	一
古本狂言文の詞章	林田 明	七
——虎清本と虎明本——		
江島其磧の文章の一特色	岩井 宏融	六
秋成などに見る近代文語の問題	桜井 光昭	八
馬琴の日記と随筆	斯林不二彦	九
明治三十年代「読売新聞」の言文一致活動	山本 正秀	三
明治期文学の文章	佐藤 孝	五
——言文一致体の発生を中心として——		

「御湯殿上日記」にみえる謙讓の補助動詞「まゐる」の用法	国田百合子	一五
-----------------------------	-------	----

「まゐらす」と「ます」	安田喜代門	一九
-------------	-------	----

所謂二段活用的一段化について	奥村 三雄	二七
----------------	-------	----

——方言的事実から史的考察へ——

八行四段活用動詞音便形について	外山 映次	二五
-----------------	-------	----

——洞門抄物の場合——

雑兵物語の語法・語彙	斎藤義七郎	二七
------------	-------	----

非情の受身表現考	宮地 幸一	二九
----------	-------	----

近世上方語の接頭辞について	前田 勇	二七
---------------	------	----

「お……する」「お……いたす」「お……申しあげる」の用法	小松 寿雄	三三
------------------------------	-------	----

中野柳圃とその言語研究	杉本つとむ	三九
-------------	-------	----

——日蘭比較語法研究の出発点——

アウ・オウからオーへ	都竹通年雄	三三
------------	-------	----

明治大正期における漢音呉音の交替	飛田 良文	三三
------------------	-------	----

「西福寺藏 碧岩雷沢抄」について	金田 弘	三九
------------------	------	----

特に洞門抄物の性格に関連させて——

「粹」とその周辺	大橋 紀子	四三
----------	-------	----

西鶴本のかなづかい	島田 勇雄	四九
-----------	-------	----

——力行が行動詞のイ音便を中心に——

読本における漢字語の傍訓	鈴木丹士郎	四七
--------------	-------	----

——雨月物語と弓張月を中心にして——

「西国立志編」のふりがなについて	西尾 光雄	四三
------------------	-------	----

——形容詞と漢語サ変の場合——

明治初期の振りがな	進藤 咲子	四九
-----------	-------	----

地名の保全と正書法	鏡味 明克	五五
-----------	-------	----

漢字指導法管見	横山 吉男	五七
---------	-------	----

外国語・外来語の乱用について	天沼 寧	五五
----------------	------	----

——いわゆる国語問題の立場から——

『智環啓蒙』と『啓蒙知恵の環』	古田 東朔	五九
-----------------	-------	----

灸はしを削

好色二代男八の四

其時はやればとて、孔雀織網代舛形やうきひ
和国などの大袖にて、女良買どはいわれじ。

日本永代藏四の一

なんぞ若隠居とて男さかりの勤をやめ、大勢の
家來に暇を出し外なる主取をさせすを頼みしか
たなく難義にあわしぬ。

彼はこのような作業を通して多くの読者をつかんでいったのです。

(三)

西鶴の文章は俳文といってもよいものです。奇抜さと流麗さにおいては他に類を見ません。がしかし、俳諧の素養のない一般的な読者には判り憎いところがあったと思います。其碩はその欠点をいろいろ工夫して修正しております。

好色盛衰記五の二

何とぞ大臣になりかはつて女郎を人にぬすまれ
て、あそふ身に成たきといへり。

西鶴俗つれづれ二の三

姿をかえて夫のため後世ぼたいの道に入べし
と。

好色二代男六の三

我物を遣ふて、男ふびんがるを、人はうつけの
やうにいへ共、間夫する程の女郎に、よきは独
もなし。

好色二代男一の二

寝前の身ごしらへに、いづれもたゝるゝをもち
はず。

好色一代女一の四

すたる文ひきさきてかいまろめて、是をうちつ
けて人によるこばす程の事は、物も入すしていと
やすきなれども。

好色二代男一の二

ふるにふたつの秘傳あり、漸く取出の男は、ふ
られて其儘捨す、いつまでも手に入まで、人に内
證はいわず逢物なり。

新可笑記三の四

夫のうたがひをやすめぬ、女かく身をもつから

江島其碩の文章の一特色

り。

傾城禁短氣六の一

いかに流行ればとて、明ても暮ても似せ八丈の羽
織見せかけて、女郎買とはいわれじ。

世間子息氣質一の一

なんぞ若隠居とて男盛のつとめをやめ、多くの家
來にいとまを出し外なる主取させ、末をたのみし
かひなく。

傾城禁短氣六の二

何とぞ福な大臣に成かはつて、女郎を人にぬす
まれて遊ぶ身に成給へ。

世間娘氣質三の四

姿をかへて過ぎりし夫のための後世ぼたいの道
に入べしと。

傾城禁短氣五の一

我物を遣ふて男不便がるを初心な女郎は、虚氣
のやうに沙汰せふけれど、間夫する程の女郎に、
昔から弱きは一人もなし。

傾城禁短氣五の二

寝前の身拵へに、外の女郎起たるゝを構はず。

傾城禁短氣五の一

つみ捨たる文引裂て、掻い丸めて是を打付け、
分あるやうに見せかけ、男に悦ばすやうなしこな
し。

傾城禁短氣五の二

振るに二つの秘傳あり、漸く取出の大臣は振ら
れても其儘捨す、いつ迄も手に入迄末社にも内證
いはず、逢ふものなり。

傾城禁短氣二の一

夫の疑びを休めぬ、かゝる身持は其家榮ゆるに